

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 12 日現在

機関番号：36102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885117

研究課題名(和文)後期イングランド啓蒙におけるジョセフ・プリーストリー：科学・宗教・経済・社会

研究課題名(英文)Joseph Priestley on English Enlightenment

研究代表者

松本 哲人(Matsumoto, Akihito)

徳島文理大学・総合政策学部・講師

研究者番号：70735828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究において、私はプリーストリーの社会科学の概念を彼の思想全体の中に位置づけることに焦点を合わせた。とりわけ社会科学における実験の位置である歴史に焦点を合わせた。

本研究は以下のような結論に到達した。a) プリーストリーは合理的な議論を通して神の摂理を発見することを科学と見なした。b) 神学と科学の問題はプリーストリーにとってほとんど問題とならなかった。c) 彼は経済学に歴史的アプローチをとり、神の摂理を説明するために仮説を置かなかった。d) 知識の前進は、神の摂理の証明から引き出された。e) 新たな知識を用い技術や産業が前進し改良がもたらされ富の蓄積がもたらされる。

研究成果の概要(英文)：In this research, I focuses on the position of Priestley's conception of social science within the overall scope of his thought, and in particular the importance of the history, the natural experiment for the social science.

I reached the following conclusions. a) Priestley understood the sciences to be discoveries of the divine providence through rational arguments. b) The relationship between theology and science posed little problem for Priestley. c) He adopted a historical approach in his political economy and did not formulated hypotheses in order to explain divine providence. d) advances in knowledge are derived from proofs of providence. e) Advances create wealth through improvements and reform in technology or industry that use and apply new knowledge.

研究分野：社会経済思想史

キーワード：イングランド啓蒙 科学と宗教 経済学の形成

1. 研究開始当初の背景

これまでも 18 世紀後期イングランドにおいてプリーストリーやリチャード・プライスといった人物たちが注目を浴びてきた。当時のイングランドは、経済や科学などの中心地であり、現在の成熟化したといわれている社会を生きる私たちにとって、原点に戻ることが、今後の経済や科学の進展を考えるうえで極めて重要なことである。とりわけ彼らは、イングランド国教会に属さず、非国教徒として様々な言論活動を行っていた。当時、非国教徒には選挙権や大学への入学等が認められておらず、公的活動が制限されていたから、彼らの発言は国家からの権利の回復を目指したものであった。それは、信仰の自由を含む良心の自由にまで拡大した。18 世紀イングランド後期非国教徒はこれまでそのような政治的観点ないし彼らの宗教的観点から研究されることが主であった(例えば、杉山忠平『理性と革命の時代に生きて』1974 年、岩波新書)。そのような従来の観点に、プリーストリーの経済思想に関する要素を付け加え、プリーストリーの社会経済思想全体を自由主義的特徴を明らかとしつつ論じることが意図されていた。

しかしながら、プリーストリーの「啓蒙」はそのような観点からのみ捉えられるものではない。Peter M. Jones はプリーストリーを「産業啓蒙 Industrial Enlightenment」期イングランドにおいて「もっとも主要であり重要な」人物とみなしている(Peter M. Jones, *Industrial Enlightenment: Science, technology and culture in Birmingham and the West Midlands 1760-1820*, p.15, 2008, Manchester Univ. Press.)。「産業啓蒙」とは、産業革命期の科学的知識の普及およびその普及の産業界への伝播に着目した考えである。Jones の研究はそのような普及や伝播がどのように起こっていたのかを歴史的に考察した非常に有意義であり、これまでなされてこなかった観点からの研究である。

Jones も着目しているように、18 世紀後期イングランドにおける科学の進展は、宗教的問題とも密接に関係していた。科学と宗教の問題はこれまでも多数の論者によって論じられている。フランスにおいて宗教、とりわけキリスト教は科学にとっての足枷とみなされ、宗教は事実上放棄された。他方、イングランドにおいて、科学を進展させるためにとられた方法は、キリスト教の純化であり、キリスト教の合理的再構成であった(John H. Brooke, *Science and Religion: Some Historical Perspectives*, especially ch.5, 1991, Cambridge Univ. Press)。それゆえにキリスト教の合理的解釈を推進し、科学を推進させた人々は「合理的非国教徒」と呼ばれ、Haakonssen(ed.)が広範に考察したように 18 世紀後期イングランド啓蒙を担う活躍を見せた (Knud Haakonssen(ed.),

Enlightenment and Religion: Rational Dissent in Eighteenth-Century Britain, 1996, Cambridge Univ. Press)。

しかしながら、このような観点から「産業啓蒙」や「合理的非国教徒」に関する研究はこれまでもなされてきたが、プリーストリーに焦点を当てた研究は多くない。また、産業革命の進展とともに登場した経済学 Political Economy がどのような形でプリーストリーや彼らの仲間たちの考えに入り込んでいたのかを考察した研究は申請者の研究(後掲論文 1. 3. 4.)以外これまで存在していない。それゆえに、18 世紀後期イングランド啓蒙においてもっとも重要な人物であるプリーストリーをこれまでの宗教、科学、国家といった問題だけでなく、それらの問題が経済や産業、経済学とどのような関係を持っていたのかに焦点を当て研究を行いたい。また、現在を生きる私たちにとっても、科学と経済や産業のつながりをそれが始まった時代に戻ることによって現代のそのような問題を考える際のヒントとなるであろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、18 世紀後期イングランド啓蒙の特徴を明らかにすることである。とりわけその思惟要素としてジョセフ・プリーストリー(Joseph Priestley, 1733-1804)の宗教・科学・経済に焦点を当てる。プリーストリーにとって科学とは、神ないし創造者が地球上に埋め込んだシステムを解明するという意味で宗教的な側面からの営為であったことは否めない。しかしながら、そのような側面だけでなく、実際に埋め込まれたシステムを運営するのは人為である。それゆえに、科学的知識を産業革命の推進のために利用しようとするれば、その知識の利用が経済的どのような影響力を社会にもたらすかを考察しなければならない。18 世紀後期という産業革命期においてそのような問題は非常に重要な問題であった。富の拡大はあらゆる人々に影響を与える。富を増加させるためには知識の増加が必要であり、知識の増加は神学的に制限されているような状態では達成されない。イングランド啓蒙は、このように宗教的側面を保持しつつ、国家に個々人の知識の追求の自由を要求し、知識の増加に伴う富の拡大および富裕が人々にもたらす効果を考えていたのであった。本研究ではこのような特徴をプリーストリーから析出することを目的とする。

3. 研究の方法

18 世紀後期イングランド啓蒙を産業革命との関係から論じ、その特徴を明るみに出すためには、その思惟要素として取り上げたジョセフ・プリーストリーが啓蒙や科学、産業、経済をどのように考えていたのかを明らか

にする必要がある。そのために、これまで出版されている著作から彼の思想のエッセンスを抽出し、その特徴を明らかにするとともに、彼が影響を与えたり、影響を受けたりした人物たちとの知的ネットワークを考察することもその特徴を描き出すのに有効な手段であるだろう。したがって、まず彼の著作における様々な事象を整理し、彼がどのような方法でイングランド啓蒙を展開していたかを明らかにし、その思想形成および伝播がどのようになされたのかを著作だけでなく手紙や彼の知的ネットワークを明らかにする手紙や当時の歴史状況などを詳細に調べ、その特徴を明らかにする。

4. 研究成果

18世紀後期イングランド啓蒙思想における知的ネットワークを明らかとし、その啓蒙の特色を論じるために、プリーストリーの論的であるジョサイア・タッカーならびに彼と政治思想的に極めて同様の傾向を持っているとみなされていたトマス・ペインとの比較・考察をそれぞれ行った。(雑誌論文1.ならびに図書1.がそれぞれ該当する)

タッカーとの類似点は、宗教と政治や経済の融合を目指すという点であったが、彼らの宗教的な立場の違いから、両者の政策的含意は異なるものであった。

ペインとの論争は、両者の神学的な相違点にもかかわらず政治思想における類似性を持った。彼らの共通点はロック的な社会契約論にあり、現世の領域における人事の点に関しては共通したが、来世をめぐる問題では対立していた。政治面においては両者は同類の発言をしているにもかかわらず、彼らが科学において異なる側面を持っていたことはここから説明することができるのではないだろうか。

このように18世紀後期イングランドにおいては宗教と経済や政治の問題は一体化したものと論じられており、フランス啓蒙が目指した科学からの宗教の分離とは異なる過程をもっていたのであった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

1. 松本哲人「プリーストリーのペイン批判：ユニタリアニズムと理神論」『ピューリタニズム研究』第9号、40-50頁、2015年3月。査読有

〔学会発表〕(計 7件)

1. 松本哲人「プリーストリーのペイン批判：ユニタリアニズムと理神論」第9回日本ピューリタニズム学会研究大会、青山学院大学、2014年6月21日。査読有

2. Matsumoto, Akihito 'Joseph Priestley's Methodology of Social Science' リカードウ国際会議、沖縄県男女共同参画センター「ているる」3階第1会議室、2015年3月6日。
3. Matsumoto, Akihito 'The Role of Social Science in Joseph Priestley's Thought,' The 19th Annual Conference of the ESHET, Roma Tre University, Roma, 2015/05/15、査読有。
4. 松本哲人「J.プリーストリーとT.H.ハクスリー」マルサス学会第25回大会、弘前大学、2015年6月27日、査読有。
5. Matsumoto, Akihito 'The role of social science in Priestley's thought: political economy and wealth as sources of peace in the world,' The 4th ESHET-JSHET Joint Conference, 小樽商科大学、2015年9月12日、査読有。
6. 松本哲人「イングランド啓蒙における宗教・経済・政治 ジョサイア・タッカーを中心に」第40回社会思想史学会全国大会(セッション報告) 関西大学、2015年11月8日。
7. 松本哲人「J.プリーストリーとT.H.ハクスリー 18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人」第15回ヴィクトリア朝文化研究学会(シンポジウム報告) 同志社大学、2015年11月21日。

〔図書〕(計 1件)

1. 松本哲人「ジョサイア・タッカー：宗教・経済・政治」佐藤光・中澤信彦編『保守的自由主義の可能性』ナカニシヤ出版、61-85頁、2015年10月。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 哲人 (MATSUMOTO, Akihito)

徳島文理大学・総合政策学部・講師

研究者番号：70735828

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：